

各関係機関長様

熊本県病害虫防除所長

ヒメトビウンカのイネ縞葉枯ウイルス保毒状況（技術情報第3号）について
（送付）

このことについて、下記のとおり取りまとめましたので、業務の参考に御活用ください。

記

1 調査概要

- （1） 本年5月14～29日に、県内18地点の小麦から採集したヒメトビウンカについて、イネ縞葉枯ウイルスの保毒状況を、高比重ラテックス凝集反応法を用いて調査した。
- （2） 保毒虫はほぼ全地域の17地点で認められ、保毒虫率は平均3.8%（平成25年4.8%）で平成よりやや低いが、一部高い地点も認められた（表1、図1）。

2 今後の留意点

- （1） 麦類のほ場は、ヒメトビウンカ第一世代の増殖場所である。麦類の栽培面積が広い地域では、密度が高まりやすいので、保毒虫率の高い地点ではイネ縞葉枯病の発生に注意する。
- （2） イネ縞葉枯病の発生を防ぐためには、病原ウイルス（イネ縞葉枯ウイルス）を媒介するヒメトビウンカの防除が重要である。
- （3） イネ縞葉枯病は、感染時期が早いほど被害が大きいため、箱施薬剤によるヒメトビウンカの防除に重点を置く。なお、県内では、各種薬剤に抵抗性を獲得したヒメトビウンカの発生が確認されている（平成25年4月22日付技術情報第2号
<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/H25/yosatu/130422gigyutu.pdf>）
- （4） ヒメトビウンカに対する箱施薬剤の効果は、イミダクロプリドおよびフィプロニル粒剤の効果は低く、ピメトロジン粒剤は効果が認められる。
<http://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/47796.pdf>
- （5） 発病株を認めた場合は、伝染源になるのでできるだけ早めに抜き取る。
- （6） 多収米（飼料用米等の多収性品種）の中には、イネ縞葉枯病に対して罹病性の品種（モミロマン、ミズホチカラ等）もあるので、栽培する品種に応じた防除を行う。（「飼料用米の多収性専用品種に取り組むにあたって—多収性専用品種の栽培マニュアル【平成26年1月22日改定版】」、農林水産省、平成26年1月、
<http://www.maff.go.jp/e/seisan/kokumotu/pdf/siryoyoumai3.pdf>）

熊本県病害虫防除所
（熊本県農業研究センター 生産環境研究所
病害虫研究室 予察指導係）
担当：山口 TEL 096-248-6490

表1 ヒメトビウカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫検定結果（平成26年6月）

No.	地点名	検定数 (頭)	保毒虫数 (頭)	保毒虫率 (%)
1	熊本市富合町新	96	9	9.4
2	熊本市城南町碓	96	4	4.2
3	宇土市走潟町	96	8	8.3
4	玉名市北牟田	96	3	3.1
5	玉名市岱明町野口	96	2	2.1
6	山鹿市南島	96	4	4.2
7	山鹿市菊鹿町	96	4	4.2
8	菊池市赤星	96	3	3.1
9	菊池市七城町	96	3	3.1
10	合志市栄(農研センター)	96	5	5.2
11	大津町町	96	5	5.2
12	嘉島町下六嘉	96	6	6.3
13	甲佐町糸田	96	0	0.0
14	御船町上高野	96	2	2.1
15	八代市千丁	96	3	3.1
16	氷川町若洲	96	1	1.0
17	あさぎり町免田	96	1	1.0
18	多良木町多良木	96	3	3.1
合 計		1,728	66	3.8
昨年値(平成25年)				1.6
平年値(過去10年の平均)				4.8

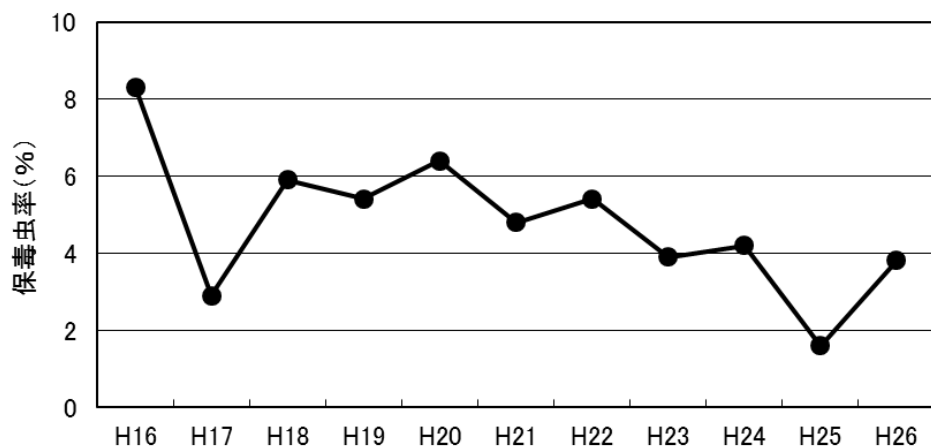


図1 ヒメトビウカのイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率の推移
(H17はネットトラップで捕獲された虫で検定を行った。)